ISSN　1342-4866

山形大学附属博物館報36

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY　　2010．3

目　　次

五十路の空中散歩 …… 丸　山　俊　明（1）
資料紹介 ― 満谷 国四郎《風景（白石島）》― …… （3）
「大学の歌、今昔」Information Desk …… （5）
石島先生を偲んで …… （5）
石島庸男先生の死を悼む …… 横　山　昭　男（6）
平成21年度事業報告 …… （6）

五十路の空中散歩

丸　山　俊　明（附属博物館館長）

現在、「ちきゅう」という船が地球を相手に活躍中だ。海の底を掘るために日本が造った最新鋭の科学調査船である。2002年に瀬戸内海で進水式を挙げ、長崎で完成した海底ボーリング専用の掘削船で、全長210m、幅38m、船の中央に高い櫓（デリック）を備えている変わった格好の船だ（写真１）。全高130mという船体だから、陸に上げたとすれば山形駅西口の霞城セントラルビル（114.65m）よりも高くなる。

写真１　日本が誇る深海掘削船「ちきゅう」
海洋研究開発機構のHPより

なぜ海底に穴を掘るのかといえば、いくつかの目的がある。第一に、海底の地層を掘り出して地球の歴史を紐解くという課題が挙げられる。恐竜絶滅のきっかけとなった隕石衝突事件の証拠も、じつは海底に残されていた。つまり、隕石衝突によって立ち昇った黒雲が、地球を取り巻いたのち重力に引かれて海の底に沈み、地層に内包されて当時の様子を物語ってくれたのだ。海底の地層を調査すれば、古い日記帳のページをめくるようにその時々の事変を解き明かすことができるのである。

次に重要なテーマは資源探査だ。石油や石炭に代わりうる有望な燃料として、メタンハイドレートが発見されている。メタンが氷のように固まり、地層となって海底に蓄えられていることがわかってきたのである。第三は新生物の調査だ。海底は光も酸素もない暗黒の世界であり、生き物など住めるはずがないと信じられてきたが、その劣悪な環境のもとで硫化水素などの毒物を餌として、太陽光線に頼ることなく暮らしている生物群集や微生物が相次いで確認されている。ひょっとしたら、ペニシリンを精製したように医療に革新的な効能をもたらす新種の生物が生息しているかもしれない。そして第四の究極のテーマは、地震の解明だ。日本周辺で起きる巨大地震の震源は海底にある。震源域の岩石の状態を観察したり観測機器を地層深く埋設することによって、すみやかに前兆をとらえようというプロジェクトが動き出している。

このような科学目的を実現するために、船を海上の一点に静止させたままの状態で鉄パイプをつなぎ合わせて海底まで降ろし、そこからボーリングを始める。「ちきゅう」は、海の平均水深（約４kmつまり富士山をそっくり沈めた深さ）からさらに７kmの穴を掘れるように設計されており、船上には全長10kmを越す鉄パイプが積まれている。いよいよマントルまで掘削できる能力が備わったのである。かつて人類が地上で掘った一番深い穴は、旧ソ連邦の時代に北極圏のコラ半島で掘削された12.262kmである。津軽海峡の青函トンネルが全長53.85km、英仏海峡のユーロトンネルが全長50kmと、人類は横にトンネルを掘る建設技術は進化させてきたが、大地を縦に掘る科学探査技術となるとまだまだ挑戦中だ。

洋上でひとたび掘削を開始したら、船はもう身動きできない。船底から数千メートルの鉄パイプが海底まで延びているからだ。研究者や乗組員の交代、そして物資の補給はヘリコプターを使う。ヘリコプターに乗る前には必ず水難講習を受けるが、これは洋上に墜落したときの水中脱出訓練である。座学で免除される私（年寄りだから？）のような場合もあれば、海水パンツでプールに投げ込まれる実地訓練もある。写真２は、研究室の大学院生が昨秋の研修航海に参加させていただいた際のライセンスで、おそらく本学関係者では初の実技訓練体験者の免許証だ。「ちきゅう」は研究者だけのものではなく、学生にとっても重要な就職先となっている。それは、日本が中心となってこの船を運航していくことを世界に向かって約束している証しである。

写真２　ヘリコプター水難訓練修了証

筆者は、2006年に八戸沖で行われた試験航海に古生物研究者として参加し、実験室や実験装置の仕上がり具合を試すお役目をいただいた。八戸港から100kmの沖合で試験掘削を開始した「ちきゅう」に、港の岸壁に設置されたヘリポートから10人ほどの要員が中型ヘリで飛んだ（写真３）。

写真３　八戸港のヘリポートから出発

研究者、技術支援員、船員たちの日米混成チームを乗せて、飛行時間はわずか30分。ヘリは「ちきゅう」を目視すると右舷から船尾を巻いて、左舷後方からなめらかな曲線を描きながら船首のデッキに着艦した（写真４）。車輪が接地してもローターは止まらない。我々が降りると、すぐに下船するクルーが荷物を抱えてヘリに乗り込んだ。滞留時間わずか10分で、ヘリは八戸に戻っていった。こんな交代劇が週に一度の割で繰り返され、総勢120名を越える人員が少しずつ入れ替わりながら試験掘削の作業が２ヶ月あまり続いていく。昼夜完全二交代制のシフトで、食事も含めて勤務時間は12時間。衛星を介した船と陸との研究引き継ぎ連絡も重要なミッションであり、私の勤務期間は10日ほどだった。

写真４　左舷後方から着艦アプローチ、コクピットも緊張

充実した日々が過ぎ、いよいよ下船する日を迎えたが、昨日から霧が晴れない。文字通り五里霧

中で、船はときおり衝突防止のための霧笛を鳴らしながら掘削を続けている。昼まで待ったが、結局「今日のフライトはキャンセル。いまから補給船を手配します」と決まった。小型の補給船は船酔いがひどいから次のヘリにしてほしいと懇願した研究者もいたが、「もう交代の方が八戸を出港しますから、あなたが降りないとベッドが足りなくなります」と脅かされ、しぶしぶ下船を承諾させられる一幕もあった。

そして数時間後、「下船の意思を確認します」と言われ、「あー、いよいよあれか」と覚悟した。「バスケット」に吊されるのである（写真５）。

写真５
大型クレーンに吊されるバスケットと人々

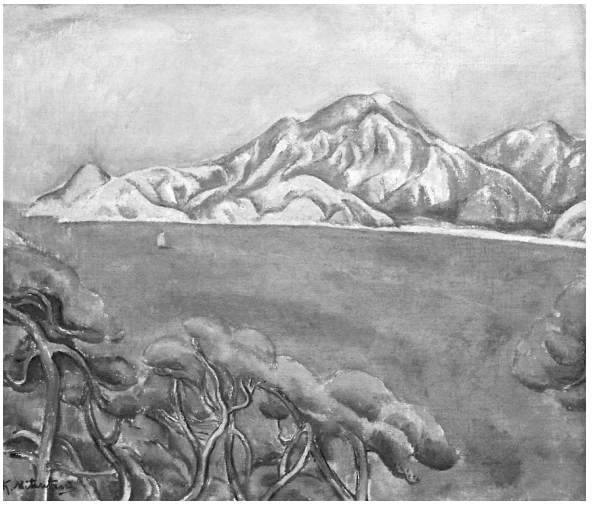
大きな「ちきゅう」と小さな補給船との間で、人や荷物を運ぶにはどうするか…、船の大きさが違いすぎて波も高いからタラップなど論外である。「ちきゅう」には大型のクレーンが何基もあるのだから、「バスケット」を吊り下げて運ぶことなど訳もない。ついに自分の番がきてロープにしがみついたが、霧に囲まれているせいか恐怖心はさほどでもなく、まだ明るくて海面が見えたのでそう高くは感じなかった。遊園地の乗り物よりずっとスリルがあっておもしろい。わずか５分程度の空中散歩を満喫した（写真６）。ヘリで空路を飛んで来たときにはわずか30分だったが、同じ100㎞を海路で帰れば５時間かかる。補給船が八戸港に接岸したときには日付が変わろうとしていた。

写真６
バスケットでの洋上空中散歩
右端が筆者

注：写真３、写真４、写真５、写真６は同僚研究者のご厚意による。

資　料　紹　介

満谷（みつたに）　国四郎（くにしろう）《 風景（白石島）》



カンヴァスに油彩
45.7×53.1 cm、大正10（1921）年頃

曲がりくねる松の枝を手前に、画面はやや俯瞰するような視線で描かれている。中央には青い海が広がり、後景には赤みがかった色の山肌が見える。海面には一艘の帆掛け舟。油絵具に特徴的な表面の艶は見られず、簡略化されたもののかたち、波を感じさせない平面的な海、これらの要素からどことなくのどかな印象である。瀬戸内海の白石島（岡山県笠岡諸島）を描いた光景である。

作者の満谷国四郎は明治７（1874）年、現在の岡山県総社市に生まれ、昭和11（1936）年、63才で亡くなるまで明治・大正・昭和初期と長きにわたって文展や帝展などで活躍した洋画家である。当時の知名度に比べ、今日それ程大きく取り上げられることはないが、近代日本美術の歴史の中でも重要な作家の一人である。

満谷は岡山県尋常中学校在学中に画家の道を志

して上京。明治初期洋画の先駆者、五姓田芳柳に師事後、小山正太郎の主宰する洋画塾不同舎で研鑽を積んだ。重厚な色彩で時事や風俗、物語に題材を得た写実的な作品で、高い評価を受ける。初期の代表作には≪車夫の家族≫（明治41年、東京藝術大学美術館）がある。その後、アメリカ経由で渡欧。吉田博や鹿子木孟郎ら仲間と共に、明治美術会の後身ともいえる大平洋画会を創立。若くして画壇の中心人物となるも、大原孫三郎の後援を得て明治44（1911）年に再び渡欧しアカデミー・ジュリアンで学んだ。留学が容易な時代ではない。当時の西洋体験は島崎藤村や与謝野晶子、藤田嗣治、小杉未醒（放菴）らが書き残しており、その様子は今読んでも大変面白いものだが、なかでも満谷は画家仲間の中でやや年長格の人物として描かれている。リーダーというよりは穏やかな人柄で慕われていた様子が窺える。

フランス滞在中はアカデミックな技法の修得よりも、小杉や山本鼎ら日本人画家と交流し、当時評価の高かったシャヴァンヌやセザンヌなどの作品に親しんだようだ。大正３（1914）年に帰朝し発表した作品は、後期印象派に影響を受けたものになっていた。大正12（1923）年には初めて中国、朝鮮各地を旅行。それからは東洋に取材した題材が多くなる。徐々に明るい色彩とかたちの平面的処理により装飾性の強い画風へと転向し、晩年の代表作では大胆な構図の中に裸婦を描いた≪緋毛氈≫（昭和７年、大原美術館）がよく知られている。

本作品の裏面には「山形高等学校　第一七号」「白石島　満谷　一九廿一年」と書き込まれ、制作年は大正10（1921）年頃、満谷帰朝の数年後の作と考えられる。画面の装飾性を重視し、表面の「つや消し」効果のためアブソルバン（吸収性の下地）を使用している。洋画家たちが日本人独自の洋画を確立せんと試みていた時期である。本作品は、満谷が後期印象派の影響を受けつつも、自分の感性にそった絵画を模索していた転換期の作品と位置づけられよう。

本作品は山形大学の前身の一つである山形高等学校（以下、山高と略）の旧蔵品であった。長期間学内で保管されてきたが、平成19年当館へ移管され、平成20年度には地域教育文化学部の小林俊介准教授の研究プロジェクトによって表面の損傷や本体から外れかかっていた額の保存・修復の処置、そして作品自体の調査研究がなされた。

その来歴は不明なところが多い。小林准教授の説によれば、大正４（1915）年に山形市役所で開催された「望郷会」展との関連が考えられる。当時の新聞から、そこで満谷の≪人体≫という作品が展示されたことが分かっている。「望郷展」とは、県出身で在京の美術家が組織した展覧会で、その中心人物の一人に山形市出身の彫刻家、新海竹太郎がいた。竹太郎が旧知の仲であった満谷の作品を山形に招き、その一つが山形に残ることになった可能性があるというのだ。その一方で山高初代校長の三輪田輪三（前任地が岡山県第六高等学校）が、中央画壇で名高い満谷作品を購入した可能性も考えられる。

今年度、当館では「毒地社とその時代展」という特別展を開催した。大正11（1922）年に結成された山形の洋画グループ「毒地社」にまつわる絵画23点を展示したが、この満谷作品も同時代作品（参考作品）として壁面を飾った。様々な経緯が推測されるが、山形でも近代文化が大きく花開き山高校舎が現在の地に新築された大正中頃、本作品がその真新しい校舎の一角を飾っていたことは間違いないだろう。

本作品の調査および保存修復プロジェクトにあたっては先述の通り小林俊介准教授の多大なるご尽力があった。また保存修復にかんしては東北芸術工科大学美術史・文化財保存修復学科西洋絵画修復講師（当時）の坂井史恵氏と学生の皆さんにもご協力を得た。ここに記して厚く御礼申上げる次第である。

主な参考文献

・岡山県立美術館編集『満谷国四郎展』岡山県立美術館、1993年
・満谷昭夫・宮本高明『満谷国四郎残照』創元社、2006年
・満谷国四郎≪白石島≫調査および保存修復プロジェクト編『満谷国四郎≪白石島≫調査および保存修復報告書』山形大学地域教育文化学部小林研究室、2009年

（附属博物館　森谷 菜穂子）

「大学の歌、今昔」

Information Desk

昭和24年に新制大学としてスタートした山形大学は昨年で60周年を迎え、それを記念し大々的に大学歌の募集があった。

さて、話しは平成21年秋、特別展のための調査で市内の大学ＯＢ宅（昭和38年卒業）を訪問したことに始まる。参考資料として見せていただいたファイルの中に、黄ばんでよれよれになった小冊子を見つけ、興味を惹かれて手に取ってみた。

それは昨今目にすることのなくなったガリ版刷りで「山大音頭」と題され、歌詞と楽譜がついたＢ４版４枚を二つ折りにしたものであった。

「昭和26年４月10日」と裏表紙にある。

一番から六番までの歌詞は学内の各学部、図書館までも網羅した内容となっていた。誌面の都合によりすべてをご紹介できないが、さわりの部分を掲げてみよう。（一部　略）

一、もえる若草文理の園に
　　真理追羽あの子もまじる
　　破れ帽子は昔の話しじゃ・・・
二、森の親鳥ねぐらをぬくめ
　　愛の手習いろはにほへと
　　ひなの育ては樂じゃないけど・・・
三、米織姫の胸よりあつい
　　意気で車が火花を散らす
　　工という字じゃ負けるもんかね・・・
四、米の庄内じまんじゃないが
　　それも情けでかためる宝
　　土のことならなんでもござれ・・・

昭和26年といえば、終戦から６年の時が流れてはいるものの新制の山形大学となって２年目であり、学内はまだ混乱と戸惑いの中にあったようだ。占領下の日本に巻き起こったレッドパージ（共産主義の追放）の嵐は、ここ山形大学でも学生に対する県教委からの就職拒否や、教員の追放という形で吹き荒れ、多難なる前途を予感させる出来事が相次いでいた時期であった。

しかし、それ故に学生や教職員の中に「山形大学」としての連帯感と団結をなんとか築き上げようとの機運が高まってきたのではないだろうか。

作詞は当時の庶務係長・高山英夫氏と庶務係員であった林薫氏、作曲は同じく林薫氏。今となってはその頃を知っている職員は学内にも皆無であるが、職員ＯＢに取材したところ「高山さんは背が高いダンディな方で、実兄は高名な哲学者の高山岩男氏。林さんは繊細な文学青年という雰囲気の方だった」との思い出話しを聞かせて下さったが、その方は「山大音頭」の記憶はないとのこと。

ふすま同窓会（人文・理学部同窓会）の大先輩方にも聞いてみたが、やはり歌の存在自体をご記憶にないという。

決して職員の座興によるお手盛りではなかったはずだが、大学の「50年誌」及び「大学史関係資料目録」には記述どころか手がかりさえも残されていない。間違いなく存在したのに、正式な記録と人々の記憶からは欠けおちてしまったまぼろしの歌であるようだ。

山形大学には「ああ乾坤の春の色　花永劫に悩ましく」で有名な寮歌や「われらここに聚う」「みどり樹」という歌い継がれてきた名歌があるが、各学部の様子を網羅した歌詞は珍しい。「音頭」というだけに格調高いわけでも美辞麗句が並んでいるわけでもないが、各キャンパス・学部、教員、職員、学生が心をひとつにして我が大学を盛り立てていこうという心意気は充分に伝わってくる。

ＯＢ宅で偶然目にした「山大音頭」は、諸先輩方の大学への熱い想いを再認識させられると共に、現在の大学を振り返るよすがともなった。

（附属博物館　高橋 加津美）

石島先生を偲んで

山形大学地域教育文化学部長、山形大学副学長等の要職を歴任され、退職後は山形大学附属博物館のボランティア第１号として「往来物・御手本類」の整理を中心にご活躍いただいた石島庸男氏が平成21年11月８日にご逝去されました。博物館の一員のように事務室に溶け込んでいらした生前のご様子が忘れられません。同じボランティアとして活動されていた横山昭男名誉教授から石島氏を悼む言葉をお寄せいただきました。

石島庸男先生の死を悼む

横　山　昭　男（山形大学名誉教授）

石島さんは私より十年も若く、大学を退官して丸二年を過ぎたばかりに、他界されるとは残念の極みである。石島さんと私は勤務する学部が同じであったばかりでなく、一緒に仕事をすることが多かった。1990年代、中国・吉林師範学院との国際交流の締結では、準備段階で共にいろいろな世話役をしたこと、研究面では、石島さんは教育史が専門で、とくに実物資料への造詣が深く、私どもの歴史研究との交流も積極的でした。そこで退官後は、博物館で会うことを共に楽しみにしていたのである。心から御冥福を祈りたい。

平成21年度事業報告

平成21年度に本館で実施した**博物館実習**の単位修得者数は下記のとおり。

（単位：人）

学　　部	人　　数
人　文　学　部	３６
地域教育文化学部	１４
理　　学　　部	３２
学　　外　　者	２
計	８４

公開講座は「美術館でアートに親しむ」と題し、美術作品を取り上げたシリーズの４回目、最終章として山形美術館を会場に開講された。毎年熱心な市民に支えられてきたが、今回も定員を上回る参加者で好評のうちに閉講式を迎える事ができた。**講師・演題**は下記のとおり。

第１回	11月28日（土）
・「彫刻に触れよう」	元山形大学　教授　雨宮　透
・「背面の美」	山形大学　教授　阿部　成樹
第２回	12月５日（土）
・「鮭をめぐる話」	山形大学　准教授　小林　俊介
・「山形城本丸御殿の杉戸絵」	山形大学　教授　宮島　新一
第３回	12月12日（土）
・「本を読む女」	山形大学　教授　元木　幸一
・「山形美術館のコレクションの成り立ち」	山形美術館長　加藤　千明

特別展は、平成21年11月９日から20日まで小白川図書館２階を会場に「毒地社とその時代展」を開催した。

大正11年、この山形の地で芸術を志す若者たちによって作られた洋画グループ「毒地社」のメンバーの作品を集めた本展は、例年にも増して学外からの見学者が多く、地域に根ざした博物館としての機能を充分に発揮することができた。

なお、その他の博物館で実施した事業については、博物館のホームページで随時、写真入りで詳細にお知らせしていますので、是非ご覧下さい。

平成20年度見学者総数

一般成人	個　人	５９２人
	団　体	２５６
大　学　生	個　人	1,５６９
	団　体	３２９
児童・生徒	個　人	２６
	団　体	８２０
合　　計	個　人	2,１８７
	団　体	1,４０５
	総　数	3,５９２

※ オープンキャンパスでの入場者は含まない

附属博物館では、所蔵品を授業等で利用していただけるよう、協力体制を整備しています。
お気軽に係員までご相談下さい。

山形大学附属博物館報　No.36　2010. 3 発行
編集兼発行人　山形大学附属博物館
〒990－8560　山形市小白川町一丁目４－12
（ＴＥＬ）023（628）4930（直通）
（ＦＡＸ）023（628）4930
URL http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/
E-MAIL hakukan@jm.kj.yamagata-u.ac.jp